

羣書備考

十八

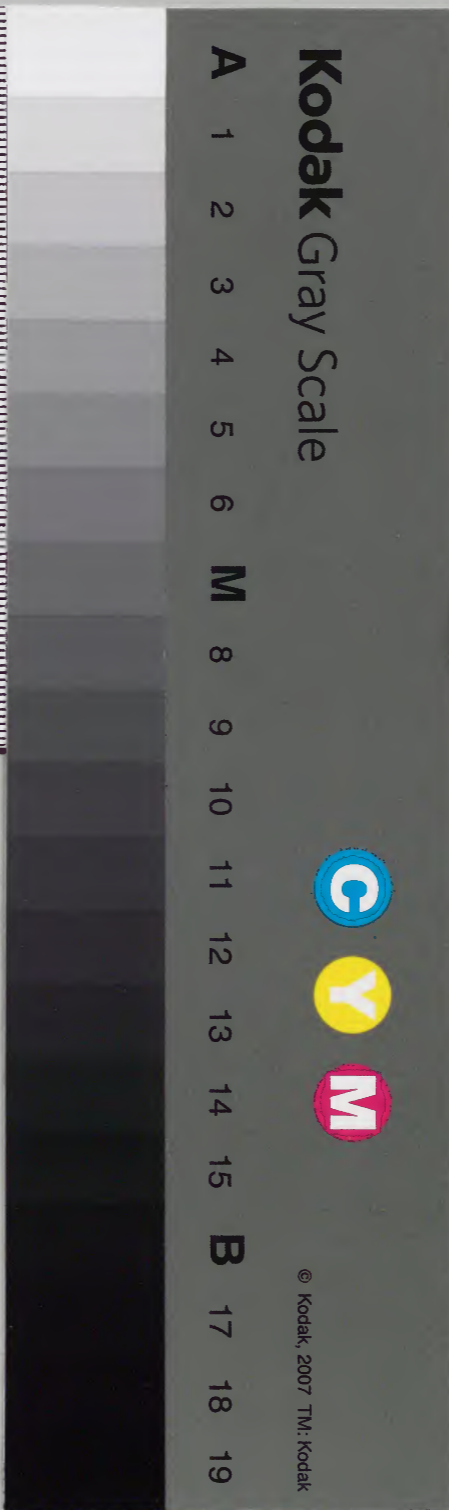
番外書房

				和書門
二	一	五	一	八
三	二	一	六	六
冊	架	函	號	類

庫文閣内		和書類
二	一	八
八	二	六
函	三	六
二	冊	三
架	架	號

類抄

内閣文庫	
番號	和 18663
冊數	23 (21)
函號	218 76



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

群書補考卷之十八



今日江寺日親撰

權大僧都日英十四歲登正平二年日寇上人馬師平

年用江延於本江寺花園洗沐永享十一年諫將

軍義教公之疎日連宗公大怒曰此度不加罰吾未下

命也汝若再諫必為斬于時於相國寺有麻苑相國

之道薦日親又作立正治國論一卷獻之謂居公信邦法

一

自是甘稱銷蒙上人遂被殺

淺草文庫

宝初集

平奉頼撰

曰書云平判官奉頼入道禰性照曾侍自鬼界萬後
道後德東山双林寺山庄於茲撰宝初集今大德寺前
山門西向一堆墳上之松亦是康頼之塚也

感身記

無云喜直撰

曰書云感身記無云自錄一生事業至八十五歲他年
然無云年九十而卒

日本紀

中右圓月撰

曰書云中右圓月嘗撰日本紀然有朝議不行

伏

東征傳一卷

玄開撰

廣大和名勝志云采高僧傳卷十四唐揚州人大雲寺鑿
真傳曰唐相沢達於日本其國王歡喜迎入城大寺安
止初於盧舍那殿前立壇為國王授菩薩戒中略彼國
瑞州大和為傳戒律之始祖也以日本天平宝字七年癸
卯歲五月辛酉無疾辭眾坐亡身不頃壞乃唐代采唐
德元年其僧思託著東征傳詳述高僧傳前
謂城大寺城為作東思託鑑真之身子云用元寺僧
也東征傳有思託五言初謁大和上二首并序東征傳
一卷宝龜十年二月淡海真人玄開撰今日本世世
託著東征傳者誤也

二

曼陀羅抄

自卷之人撰

集儀抄之心永平十四年十月十四日自卷之人極樂坊十
詣了洋土曼陀羅并小佛舍利等之拜託了了後
曼陀羅抄之述作

東國高僧傳云狀聖觀音自卷俗姓千波白非成龍座
幼學悉教後遇常福同公誠亦相授學淨業為採薪
執役并修功德同濟其志述二藏教併尋頌後之聰智
就武江創增寺冠其教四方而立聖包至者憧憧弗他
遂成法席後於心永平十四年七月十八日順寂

法華經義疏 四卷

聖德太子撰

和州法隆寺聖寶目錄之法華義疏四卷太子御自筆
是本朝佛書副作之始也

太子得勝之推古天皇二十二年甲戌春二月八日始製
法華經疏

又云二十三年乙未夏四月十日製法華經疏竟此經
疏者自前製了傳於深土而今復為製狀諸法
師等義理抄說并夢金人所授之思識之義以同
惠慈法師之亦願悟茶不思識歎未曾有故稱上宮
後疏

同書首註云今此疏蓋多嚴以御魂取壽日之御行
小抄一令事恰也七卷二十七卷也其提婆之子觀音三
三廿尊為狀此御事本疏今在法隆寺舍利殿也

後疏

三教指帰

弘法太子様

和州四好聖考云廣瀬郡凡此三池の三池弘法太子
御成りし時三教指帰の聖迹ありて池の
三教尊とつとゆひし今不詳

松蔭硯記一卷

月舟知為様

歴大和名勝志云松蔭硯一葉呼知恩寺百万遍とあり
硯記云南禅寺月舟知為手録二年前作一葉後祐和
院才硯中殿賣人の時内侍教書一通あり共不知恩寺何室
の遺りしと前知也也と則ち麻寺とありと云ふ事案

待後考

大和寺社記云松蔭の硯是平相國清盛末朝
御成りし時一葉ありて硯中將重
衝不待と重衝一の卷と曰人ありし鎌倉
下の御所と云法然上人と戒律したの法然上人
御成りし時一葉あり

吉野の國

茨城信清様

廣大和名勝志云坊間不詳なり吉野の國是ものありて徳
年の中京の書肆茨城信清と云人見事馬信行國古
神の國と云ふ事不詳の國と事詳且見録前
者大和必見なりと云ふ一葉ありて後地不詳なりと云

四

高野山印行

益田池碑銘

法門通照金剛經

廣大和光勝心坊同小益田池碑銘云々
又高野山明王院前藏の模云々
和同の許云々
一見云々
益田碑云々
高野山印行云々
和同二年云々
高野山印行云々
和同二年云々
高野山印行云々

五

高野取城の良満十甲四方の積雲風雨〇〇の四字を彫
た月々人々云々
和同二年云々
高野山印行云々
和同二年云々
高野山印行云々
和同二年云々
高野山印行云々
和同二年云々
高野山印行云々

今

源白初語

紫式部撰

古今源流秘抄云源白の事... 紫式部ハ作手物語... 言出... 及名言... 大旨四規... 源白の... 爲言の書集... 夫と指...

寛永入系圖 三百廿卷

官撰

天正... 寛永十八年... 諸家の系圖... 三百廿卷... 成... 是... 寛永入系圖... 日... 一... 行...

今朝通鑑

官撰

日... 寛文十庚戌... 今朝通鑑の編纂... 成...

宇治拾遺集十卷

大納言源隆國卿撰

先道日記云或記曰大納言隆國... 致仕用長... 宇治拾遺集又宇治大納言初語

言初語

二源白初語

紫式部撰

先道日記云使初語五十餘... 好... 今... 五倫...

之邪もさしきしと不讀佛乘の因轉法輪の徳
り假不詞もさしきし 作物器之

花実卷百露百首

花実卷貞高撰

難波名所分紀云花実卷貞高ハヤシノ敷海の
乃不向ノ是清物ノ一ノ才武平鑑の古風ヲ学ビ
奇ノ貞徳ヲ雄長ス。而シテ其ノ道文ノ一
久月ノ不ノ一ノ百首ノ一ノ松白雅
舟法爲ノ一ノ花実卷百露百首ノ一ノ文
是世ホ流布ノ一ノ皆大ノ恩ノ一ノ文

玉造

弘法大師撰

曰書云玉造の文の事 高僧大師の行作も亦
いふに時代相違もいふも大衆に製するの目録
九十二番目小いしとてあとの疑心もあらず

和漢朗咏集

四條中納言公任卿撰

京師巡覽集云長谷ノ岩倉の岡ニ朗咏谷あり一草一木
の御事不四年垂穂公任卿ノ不も和漢の詩歌
獨りあつたてぬぬ朗咏ハハノ風雅馬集風俗
の後不起ノ我ノ邦中世ノ以上上朝迄ノ下行堂
ハハノ詩ノ一ノ歌謡ノ一ノ高咏ノ一ノ
心思澄徹ノ一ノあり

句は思奉句并物也時雅咏有為勛无常題就入題

去地下法府后良同文

選擇集

法然上人撰

山川及海心云東之大谷寺名水東新坊今小方丈の地あり
傳言十大谷の村庵小住 選擇集と撰も云可なり也

法然上人行状 甲八卷

并昌法印撰

曰書云伏見院後伏見院東之大谷寺又代加一國師と名
下淨土三經五部 九卷選擇集講演と淨土圖あり
曆感のつらき 二門切徳院の并昌法印小初と上人
行状の日記と撰述 一 西上皇後二年院の康平又尊
因法親王并廿尊寺家良康平書し之の 一 全篇

甲八卷畫圖ハ土佐の吉光と云 今至康平あり

廿詠一統 三百卷

菊園雅也撰

増養園説云天正中菊園丹波行住ありの伊賀小倉の
師の主人行住の子と行住と云随性軒に切切と云
和歌と書と廿詠一統三百卷と書 且外述作あり
あり松尾桃香と日中の因ありと云行住と導り
北村奉吟の門下ありと云行住の子と行住と云
畫程合と云 註不行住と云と云 治承と養文あり

今朝俗詠心 五卷

諸本主人談 五卷

江戸康子

江戸砂子 二卷

李良土産

日 續編

菊園治涼集

日書三菊園治涼六元行即大房行南山山後南山有狂南有
 又雁下卷治劔子米山梅小の諸うあう今の飯来の父の
 三悦享保八年母の於に也也元禄五年三悦の父の喜三治涼
 延宝八年庚申多う生上菊園行為の養子とあり行為
 小美子二人あう行重記之と号しいつし有情多う治涼
 の義方の治涼中田の伴の縁有業の金
 此の業の柳川直是の平人の寄目貫の縁頭の
 彫の糸の工の性の殊の論の芳の質の一の韻の門の不の世の令

専ら多業多産して後内務露治之の敬多う

治涼と改む是行の目

十多治涼平也夏死後

今朝治涼心の諸の士の人の謀の江戸の厚子
 江戸砂子李良土産の續編の今の柳下の地の
 子の或の其の年の論の議の美の不の地の説の鳴の天の
 治涼延享四年十月廿四日の法の名の葛の漢の
 南山治涼土浅茅の塔頭の林享院の平の待の世の目の
 菊園集の序の文の治の根の

寛政八年丙辰十月下旬の子の鞠の是の差の別の不の建の五
 事の多の美の序の治涼不の足の月の二の子の而の晴の行の系
 友の弟の柳の本の心の子の以の縁の有の業の俳の諧の也の

あ〜び香乃〜〜〜 某年九月某日九十九〜
年某春布衣居士或号以次〜梅五〜
諸〜〜あ〜子晴行 一七三男あ〜長子某處〜
之行 汚染の名〜 彫物〜業〜 中田玉記〜
次〜交右門次〜行〜 中田日記〜 昔〜
天年〜手子〜も〜し〜き河津平〜 僅十三歳
あ〜は菊子のあ〜六世丹〜子某あ〜今昔〜 中田
源治町 一丁目のあ〜〜の〜 中田〜
あ〜〜の〜 天仁十三年〜 不吉〜 中田某妻七十
某子當人〜十〜〜某の子〜昔〜 中田〜

二 選狀集

法然上人撰

尚友録云善惠上人傳云上人請證空世性源云天曆帝三
皇流質州刺史親季子也治承元年冬十一月九日生焉是
日家多祥瑞久我内人巨通親義是聰敏之身養子既
而證乎冠礼三儀童穉以出座志以爲嫡子父母愛惜
弗肯聽之執心周詳講母憂試占于一葉塚川還橋上
適值有一僧過而誦真觀清淨觀廣大智惠觀悲心觀
及慈觀常願常瞻仰之局因想其法甚且以忘不可
羈絆遂許諾三栴檀入室于南都北嶺諸官寺童
年之曰吾弟欲其顯名而貴特在吾水上人願特作爲
諱焉父母世情雖猶快々一從臺意爲礼贈于吾水原
空上人曰今時雖入道世之門或求無行期然吾里谷在
截三屬法蓮北若水坊亦想附真觀汝雖憐我年無

吾河之地何重曰吾今歸呼唯為土雜無復餘望上人
感重雅存心且言其言即日度之投沙砾或為大解脫
以是置上人三講改名善惠判髮之際金色觀音影
現盆水之中建久九年春深立上人因月輪輝芒殿下
之諸編者選扶備惠考立之義殿下曰至呼戒後倘
有不善者善書者詔決誰人曰淨土與肯這書要義
登附善惠聽我拜其殿下草信惠倍前時而惠自
建久庚戌迄建曆在甲柘澤者水三辺十坂親矢堂而二
十三年生日創建此堂於郡郡一十二區室治之年土
月二十日午後卒于白川遠迎院年七十五

和語記
日與上人撰

藏大勝志三本記守中與日午權大僧都范波集作者和語
記

松下敏

聽雪撫

同書云續碑集三卷厚率人統秋臺那漸餘云臺云者焉
泰以後松系流河呼莊乃又齊乃以無手乃乃道
遠流矣隆公の高方あゝ風流の者ゝ隠者あゝ
吾家の集不山里と稱ゝ大松の下の庵ゝ
位帝の承止の比矣隆公ゝ二十首の歌の題ゝ給
巧ゝ書ゝ讀たゝ其中山里と題あゝ
山ゝゝゝのぬむの隠もやゝゝの松の下の庵
我ゝ位むの四ゝ讀たゝ臺那漸餘云聽雪遠流河歌

上

以歌多感... 松下欽也作也

千載集

俊成卿撰

日書云自讚奇宗祖注云俊成卿千載集撰下
事云云并註抄云中并釋凡云
事云云并註抄云中并釋凡云

梅城錄

天章撰

瑞谷能釋呼行狀周風曰天章居西二條京院高升
因門謝絕質用云云天章自撰梅城錄
奉定寺緣起

入道信西撰

山城名勝志云大悲山寺奉定寺在鞍馬山麓五里許寺僧
云緣起少納言入道信西代西念法師所作也云云

東大寺緣起

琳賢撰

日書云或記云琳賢考是法服草東大寺緣起也藤元
廣卿百人一首抄曰琳賢者橘義清弟也異今年
代記云琳賢入定高野山經二十年見之而然尊座

秋通史

通祥寺住持撰

因大曆三年安城應縣山通祥寺住持自僧令評謹詳凡
以書皇帝陛下中卷令評之先師奉初習長而博授教業
旁究儒術優柔獻獻以作秋史之通史以爲本朝之元

幸烏例以欲入三大藏行三天下

定三年三月八日

草根集

秋子微托

朝野舊苑為名集之三微書記年清若世稱之清
若因名歌号招月卷身旅備中國小田也詠草名年
根集兼良公製序今川下俊馬尹御二人門弟也云
云門弟之庶心般二月寺口時莊敷道者無不同律
唯有雅世竟存如心微之天才故詠歌不用入新續古
今云云

勸修寺緣起

元長卿記云永正九年五月曾勸修寺緣起書來給

元信

萬葉代也記二卷

同 總狀二卷

古今解材鈔

漫吟集二卷

厚顏鈔二卷

勢語騰新四卷

汶觀鈔三卷

源註拾遺八卷

勝心吐懷編三卷

河社二卷

類字名前外集七卷

名前補遺卷
知字正臨飲五卷

采門疏飲

秋契冲程

萬葉集註

水水天深義云程

換津名前國令云僧契冲遺亦果為津館刺町也
因珠卷云河國契冲小學博知書如編
者乃元祿十四年正月廿五日也此抄本一
十一問法云其文曰

因珠卷契冲河國契冲碑銘

仰讀契冲字空俗姓下河其先住河馬開之至

祖父又九衛門元直仕肥後守加藤清正加藤國除
季子元在仕播州尾崎城至青山寺利師即元全之
子寬永十七年庚辰歿于尾崎甫五歲母聞之
獲百人一首旬日能誦父系論讀矣語教不日又記
父母狀墨殆非庸兒七歲患疫症醫不驗在牀忽
書天滿天神神每日白遍至三七日夜夢異人來現曰
吾是菅神憐汝至誠除病延命也日為禱自最寬後
病瘳呼告父母以夢中事懇乞出家父母不可於是自
隱暹羅常誦佛神父母不得奪志遂許焉父業
州之今里妙法寺手定密師時年十一歲手定始授教
若心強讀四五遍皆誦手書十三歲薙髮登高野山
謁東堂院在字類快賢師賢如意誨誘屢稱以

馬江善後五部灌頂許可兩部大阿闍黎位勵精益求精
修一山推之實文二年依禮越請住持州出玉曼奈羅
洗既而獻其鄰城市題委歌之首於壁間以寫其志
一室一餅隨喜周遊詣和州長谷寺絕食念誦一
日登室生山薰修精練三七日苦野葛城山下九
靈異者無不稱讚又登高野山受菩薩戒於因通
寺快田此其持律益苦掛錫泉州久并里曼水坐
奇長教嚴其錄三藏通悉靈言方履諸宗章疏
至十三經史漢文選白文身無不跋涉大續箱頭從
壯日多於是疾屏州之池田川側讀日午紀以下國史
曰託身好俗歌得探歌書迄至五年就河州鬼住之命
寺堂彦呼受安流灌頂彦以為得真大印焉儀軌

儀軌二百餘卷納和州此駒至寺八年妙法寺寺立
承造寂遺命屬印住持求其前好以老母在今運不
里不得已而住焉寺傍構一室移母居養永廣深
我公義公方穩為業募註欲致之府下用碎不乾而感
公志作萬葉代五記二十卷德狀之卷上之如身一前載
雄略帝御製殺後神代卷無目是謂是乎夫雄略去
神代未遠則印前前人行未竟得具首義公是之
義其早見且奇合奉意賜白銀一千兩皆三千正呼
以充寺院修造費且贍貧乏一不以富又著古今餘材缺
人麻呂明石浦年歌曰說以鳥眺望或鳥逆行印以為
人麻呂自述旅懷也故記年收三羈旅部有謂鳥陰行
肩猶為草集訪人得大理歌曰鳥陰滑舟也不可必論

五

鳥之有無也其落句古註曰指行舟將陰也叩以鳥自
情舟中吟也猶業乎八橋歌思旅之句法也言人麻
呂過明石浦象二日遠前往無期漂樣乎朝霧朦
朧之間則其羈思如何義公讀之得嘗以鳥乎古有
明賜書欲一未見詩曰林經之性不慣謁公侯遂不
忘至母沒運院下指難渡東東津神丹珠卷屏謝
俗春清修自適義公施萊資音問不絕元祿十四年正
月徵志二十四日告送曰永訣在途有前疑則質正浦
泉問曰叩今位何字不生之域乎答曰此仇人吾乎
等而差別泉曰年等差別無異乎曰心雖平等
事有差別差別之心吾乎等老僧之言記之乎
吾結三印跏趺而化年二十二臘五寸附卷於弟子

智耀遺稿二十卷曰漫吟集隱士長流馬三序平日
解者有厚顏鈔三卷勞苦聽新四卷改觀鈔三卷
源註拾遺八卷勝地江懷編三卷河社二卷類字六
節分集七卷夕前神翼鈔八卷和字二卷遺鈔五卷
寫上義公宗門疏鈔有若干卷叩竟厚愛人恭謹能
下世有造焉忍法非說者果然聞之無前回避當時
有識無焉其鋒者嗚呼叩之歌乎卓地古今人不
得而知之也其詳事鳥身以歌學論叩亦非知叩
者也鳥頭獨欲義公命就叩三卷親受其說情誼親
歷聞訃嗚咽因錄事實據景墓之萬一三年

元祿五年正月十日

水戶府下安藤新介鳥明科撰

川老金剛頌詩

虛堂語錄事義

心經口譯一卷

請益錄

龍谿和尚撰

日書云獲津州島上郡富田莊祥雲山慶瑞禪寺
開山特賜大宗正統禪師毫發大和尚御拜塔銘

住佛國禪師支那高泉重冰沐拜撰 其畧云

師住奧村口京兆人云慶安四年朝延賜紫住持心

寺康正三年再住普述川老金剛頌詩虛堂語錄事

義云云下高^明復法皇召師入內殿問法奉對稱肯意願

大悅賜頌德山入門便捧之歌云明年^夏六月^又十一月

法皇同心任吾義乃撰心經口譯一卷^或中^或後^或其月

詔入大內親受菩薩大戒一日法皇諮詢^或師^或奉

柏樹子公堂上頓除知解洞徹根源賜以大宗正統

禪師之稱初改前著請益錄為宗統錄賜刊版

流通併親御宸翰其畧之令人咸息之見得未聞

之聞至是以機奪機以毒攻毒何止前日方竹杖靴

卻紫草履直得鉅錘古今系履俾祖朕徽毫頓折

大恣現成須彌不為洋海不慮覺日月累三世克通徹

大方始知古佛心宗大而無外呼美得真正統者也云

伊勢初語

伊勢集

伊勢稿

止

同書云伊勢守尊上伊勢の御の曰穠あは後不寺
吉宮神村
 一一人も用祖の群忌毎早土月廿日と以て
 法を修む神伊勢の門大織冠九世の孫式部
 大正氣不工類藤原経蔭おの又経蔭ハ伊勢大和
 薩摩隠岐等の任不補とて経蔭と為不伊勢守
 一付の交神と伊勢と呼ぶ早多の系東
 葉小まの付行息前と成絶世の傳覺のと
 知身の善の名奇あの一殿感不福のも
 あまのじの便と伊勢お伊勢守あの世不
 行の早多系前ののの後不不徳道建徳
 一と修のののとの村室と伊勢守
 とあの註不伊勢初證の作古本の今初の

一説掌平の作の又貞茂の馬淵の説の伊
 勢の辭言の作の伊勢の御の書の
 一とあの一とあの一とあの一とあの
 世のの一とあの一とあの
 一とあの一とあの一とあの

管神記

同書云世不須磨記の書の管神の御の世不
 一とあの一とあの一とあの一とあの
 後世の作の一とあの一とあの

思出草 身並草

似聖聞書

萬城百首

似聖法師程

近世時人傳之僧似聖始の序
 如聖安撫七座鳴の
 あり奇々好々妙子の
 儀同三司美陰公
 宗後か西の名之聖地
 前も定えらるる今尚
 西行不詳身似た是
 一戯し事さうとハ月
 一石山の救世善薩
 半江川寺の流た
 似のさうもて其の

石のさうもて其の
 出く堂も造り
 春内書其時
 並にぬら
 多座のひら
 今も

我座の
 のさあは
 子
 煩多
 前の人
 羽

浪の浦小の事一付々一他方塩竈より

之月をさすも 是れ其年四月甲寅 十日の自記也

同他人の事一付々一塩竈の浦

成丹島に塩竈より一付々一浦

あしらの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

いふの事一付々一浦

三

割る一姓を養ひ流俗を交す月十年の後姓を
養ふもあらずと申す出雲の同祖を以て信じて
嘗て詔を蒙りて諸大夫等と共に金園を以て
獲定りて又針艾の事も加へ後進の痛今も此の
少醫を以て

休書狂言

鬼貫句

鬼貫句

大相様

小正月に身

平比房様

曰書云河辺野に澤寺に鬼貫屋ありて

井戸の又族あり故不上等なり久之三

日後に心林則親おとし差向し鶴を以て

小存存り鬼貫の正風休言一方の言葉保あり

休言のありし鬼貫句様の大相様とて

其事八年に房様は生涯を以て

定意格

曰書云月書に上巻ありて貞觀十年不

七年にありて今も此の事あり

大和初御

曰書云此書に鬼の流り作る一説あり

朝臣の三男在り滋春朝臣とて

善清國系記

和泉乃新國... 瑞溪初為... 周鳳泉向... 又北... 二十...

天向... 我...

江源... 我... 二十...

鎌倉時...

休

甲... 今... 今... 今...

其... 東... 國... 恩... 錄...

日... 國... 日... 國...

三

於此所著石敢其餘自賜與是近任等三由日未内
及此沙汰昨日有令施行三首被傳下三太神房源
性者無反弄術者此加之真由類建坪於眼精之所單
不違段少之三皇令曰太神房源
松風論十卷

和泉名刺圖書大直月祖連社轉め河内山窪月三六
何少の人下子ももも月世人多小あふの文殊若
薩の化現あふも下も三業先起り貞和元年淨土
教も以て小業部も請ふ事傳書せも行も是も於
下松風論十卷も述作も下大も神教領大も
著月三三心安五年七月七日上人忍高も一人月

今日も著り了教日

契丹七圖

日書云向年額寺印坊信誼流入道阿部明
師多流不傷也の集十時契丹七の信仲和とて著
觀看の示現も其の波海一は津も女も連如上人
の法水も印入一徳流も印も是も大悲の靈告あふ
と観多今月七の後謝目也のた大も書も即今
本願寺の又後少の魚園の敬満寺同宗真宗寺
の付室も

史記

史記云史記云菅原孝標の女の著も女之印も祐子同
親玉の時也も是也義和泉寺も任も和泉の七角

小治を承北神年殿七月の日の和泉殿より一は五
位下尊存立義あり菅津二母の孫後四位上孝禰の子
一は平仁傳の孫業より今用祖不取也

後鳥羽院御幸記

定家御程

同書云才記ハ定家卿の御幸福あり忌歌より一は定家
卿の御幸あり

今朝天文志十卷

作本慶安撰

御名前同合拾遺云享保年中作本深慶平より又
西より和舟より善より又天文不精より善より聖徳より
棟宇より一は今朝天文の真儀より傳へ景徳潤より旅

大旋の運更しと形不安より一は淨天儀より今朝子

幣より是より三天殿より唐安述作の書今朝
天文志十卷あり廿二行

新拾遺集

鳥明御程

同書云皇太后宮俊成卿五條室町の御孫より貞治の
頃より鳥明御傳瀧より一は新拾遺集より撰
りより一は今の玉澤島社俊成卿社より具殿内より
拾遺抄云新拾遺集鳥明初撰享治二年三
月書内日被仰武家事同日書和舟前五年室
町自武家以行志三品被送倫首於程者云

新玉澤島社記

源寺物語注

枕草子注

源氏物語注

土佐日記注

伊勢物語拾穂抄

源寺湖月抄

万葉集拾穂抄

北村季吟註

郡名前圖合拾遺云新正清為社北村季吟前二年
の同様の社記も自筆不書の子今社記あり其記の
末に季吟著曰とありて是れは源寺湖月抄の
社記のありて是れは北村季吟之子孫の傳へし

其中に土佐日記の抄に伊勢物語の拾穂抄を實文
の抄とありては後水尾院の年を殿買ふとありて
源寺の湖月抄を延宝の二とありては万葉集
の拾穂抄を天和三年の頃とあり

枕の葉

枕草子

早稲合葉

百合草

同書云く今...の春秋のい...
頃...の美艶...
は...の人の目...送...

是長瀬子々因律一の子前々々々奉了白身々々徳々
の々々故々々々

年 岸白堂の事々々

年 岸白堂の事々々

東山不鳥羽觀々々

又後々々々々々々々々々

奉立寺縁起

久納言信西徳

日書々々々の縁起々々々々々々々々

然々々

林遊抄

御用集

鹽瀬系二林

大和右利國全々塩瀬系二林ハ海山邸林ハ終町不あ

系二平原中華の事々々々々々々々々

林清々々々朝之明帝應心四年不建仁寺の龍山

碑師果々々々朝の財お急々々々々

地々塩瀬々々々々々々々々々々

割々々々賞々々々々々々々々々

二建寺々々々々々々々々々々

遊抄々々々々々々々々々々

維維清心之建仁寺才之是山碑師入宋于時中華人

林和清才為林清因就才手社名噴系至正元年毫山

帰今朝日林清因相位来在本朝汶氏塩瀬曾塩瀬

淨因有教子其内一人身得位毫山則建仁寺中尚且
深祖無等以備事也故到今滋瀨一家悉身尚且
之幾體云一説淨因晚年歸十年云

應大和名勝志云饅頭屋字二者神方主齋妣林原家
人多曆三四年年已就建仁寺京西自來歸三時相從
未於此在日本尚姓改滋瀨云

神本人曆集經考

立頭常持

大和名前園金相寺の太皇神門近年人曆集經
考考考考考

竹取物語

心書三高市竹取 今高取書詞林採集曰取の取の白

竹取の事は古くは竹取の事なり 竹取の事は古くは竹取の事なり

取氣 今高取書詞林採集曰取の取の白

久事九人の女子達いりり

白髪子等小巻

又 今高取書詞林採集曰取の取の白

新葉和身集

初探拈

日書云芳野阿美成系 今高取書詞林採集曰取の取の白
後醍醐天皇金指示 今高取書詞林採集曰取の取の白
并云、西朝 今高取書詞林採集曰取の取の白
天皇初 今高取書詞林採集曰取の取の白
新葉和身集

職原抄二卷

源親房

源親房之南朝皇七年
行宮殿閣
是二月下旬源親房常
百官諸位職掌
今集
著

任國集

初撰

歲三良幸安世桓武天皇
奉朝臣
他
茲
年
教
兩
信
治
天
日
吉
妙

天村直福吉

天村直福吉承和二年
天皇寵愛賜之宅長
遂

元

合德治瘡記

姓白錄

初撰

曰書云為多親王桓武天皇太子也叙四品任中務
卿弘仁中奉詔于藤原園人藤原緒嗣阿倍真
勝三奈才平上毛野賴人等撰姓白錄

撰養要決

初部庶錄撰

曰書云初部庶錄左京人也少學醫術為是方書天
長初為醫博士兼典藥元正為侍醫兼內藥正
兼近三河權守庶錄兼左近道當時性多艱辛老
境鬚眉皎白及唐悅沃仰氣稍強貞觀二年十

月平年七十二撰撰養要決并卷行於世

續日本後紀

春澄善德撰

曰書云春澄善德本姓猶名部造伊勢國員布郡
人早達賜任春澄朝臣移隸左京尉冠入學就讀
辟籍未嘗輟手博涉多通幼於深忌夙有以覽
多誦於口有象人之敬時之好學尤能及者天長三
初補文學博士河津業注京近馬車宮學士尋任文學
博士貞觀二年拜左議式部大輔二年兼近江守
兼是奉詔撰修續日本後紀迄于十年奉前角
就請開獻之是年授位三位十年二月亮兼京宗

元年七十四

貞觀文

藤原氏年表

貞觀十三年二月廿五日辛酉南河内平名大江音人
菅原長善信安雄守松三貞觀式貞觀十四年六月
亮

世宗勤靜徑三卷

指掌子名曜徑一卷

滋川新術道平書二卷

金體新注三卷

滋川人松

貞觀式滋川人作世宗勤靜徑三卷指掌子名曜徑一

卷滋川新術道平書二卷金體新注三卷仕至後五

位上陰陽頭兼安在權介

厚籍要覽四卷

弘孝範三卷

貞觀格式卷

初撰

貞觀式大江音人仁壽三年任兵部大輔累遷兵部

議左衛門督著大別奉初撰厚籍要覽四卷

弘孝範三卷又初撰厚籍要覽四卷

貞觀式深密音人三舒也仁慶元年十一月亮

都良香集

三

曰書云都良香與觀中鳥文章博士兼大内記致前
權介之慶三年二月年身年二十有集三卷

文德美錄一卷

東道切韻一卷

銀勝翰律一卷

集韻律詩一卷

會分類集一卷

菅原善家集一卷

菅原善德

曰書云菅原是善嘉祥三年授正五位下累遷為
大學頭身拜左議刑部卿是善德文德美錄

十卷都良香預之又自撰宗室切韻二十卷銀勝翰

律十卷身韻律詩十卷會分類集十卷又有家

集十卷元慶四年八月身

貞觀格式

初撰

曰書云仁子雄父原姓為田讚以國人至于安隆賜姓
仁朝且為右京人安隆初以字行見稱性寬得事
順初初始禪得業王天安二年為大學寺直講貞觀
初渤海國王遣使朝聘以安隆為存同兼領客使
九年轉助教此時初撰有識公卿大夫格格式安隆
撰三集字為武藏守改續簡重更自安三和二年
五月卒年二十五

古今和歌集

紀貫之考據

曰書云紀貫之望行之子大者異才職紀友則九河內躬坦

名志志紀貫之下四人紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之

紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之

初紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之紀貫之

曰書云藤原時志平時平時平二身皇孫應顯官承平二年

拜太政大臣天曆三年八月亮年七十贈一位封信

濃公謚貞信晉奉初平藤原清貫大平臣守則

伴久永阿刀忠行考據紀貫之中卷

向宮抄

深高明據

曰書云深高明久喜年之子也稱向宮請誦朝史故

年者西宮抄

年必類聚抄

深順家集一卷

曰書云深順舉之子稱明博覺最能屬文兼善和

歌草自集字學士迂能益乎音者深必類聚抄

又有家集一卷

後撰和歌集

深順家集

曰書云深順大平臣能宣清原之輔位時之坂上望城深順

五人但後

深順家集訓解

坂上望城據

三

同書之坂上望城 叙令侍昭陽舍訓解万業和歌集
新國史

藤原美賴撰

同書云藤原美賴志平之子也稱小野宮有賢才之譽
奉新撰新國史天祿元年五月亮年十九贈正
一位封尾張之詔清慎

今朝奉深

高尚積善性

同書云高尚積善性志平之子好學善詩寬弘中撰本朝
群集

檢遺和歌集

和漢朗詠集

金玉集

深意秘抄

新撰體賦

北山抄

藤原公任撰

同書云藤原公任美賴之孫賴志之子景行大納言叙
正二位為人持識尤好詩賦兼善和歌撰檢遺和
歌集又著和漢朗詠集金玉集深意秘抄新撰
體賦北山抄等

後拾遺和歌集

藤原通俊撰

同書云藤原通俊徑平之子景行左議治部卿撰

三

好和歌心德三年 德後拾遺和歌集

江家沢家

大江匡房撰

同書云大江匡房青人二世奉周之子幼而入學博覽
多識而能屬文尤巧詩賦兼善和歌自大藏御
本尊雅仲身為中納言嘗著江家沢家且子隆
兼亦能屬文家志彰聞

藤原美資撰

同書云藤原美資美賴之孫梅小野右大臣作

今朝文粹

藤原明衡撰

同書云藤原明衡牙合之後好學若文章撰今朝
文粹

朝野群載

三善鳥康撰

同書云三善鳥康好善學為文永久許才著朝野
群載

金葉和歌集

無名氏撰

教木體撰

源俊賴家集

源俊賴撰

同書云源俊賴信之子果途木工頭集起前牙身為

三

身居京大夫性好和歌弘雅志乃大業善筆業
大江次治年中撰金葉和歌集晉者無名抄散本
龍胆等又有家集一卷

新撰朗詠

改目抄

藤原基俊撰

同書云藤原基俊右大臣俊家之子為人率直頗涉
書記尤善和歌業述在衛門佐者新撰朗詠改目
抄等

四季注記

女子辨記

水鳥記

水鳥之成程

頃差國誌云水鳥之成以差并研麻布乎洗坂常住山
長耀寺小安之成元祿十一年八月十四日後江名龍實
洗一聖日近指士之成者述 四季注記 女子辨記 水
鳥記

詞解

水鳥之成者不知何許人撰也先父以等至水始仕
此奈以直又信筑前若門後仕秀賴公大坂之役在
城中城陷戰沒而先生孤身流離及清平官于東武
許而幸祀業成志意稍甚身亦萬教候俸百餘人入
室者亦不少先生久而費饒誨而不倦侍來門至白屋
皆得真歡車馬輜濟其門不違自道乎使高身傳之

三

有子及之董徒其業先生嘗笑摩訶衍法法華侍
常誦經經有暇以圖墨茶談以烏集烏奇九十視
聽不衰一日無病而卒時元祿十年八月十四日也
近愛惜不唯以人也嗚呼先生游藝德行君子也登
平居言其始末以傳不朽身錄曰

大業日積盛德留春詩禮傳祀矣是也

元祿十年九月十四日 伊藤甚右衛門守禮誌

實天政八年八月十四日因百年忌辰再建焉

落德集 十三卷

靈序夜語 十卷

武道初心集 五卷

落德集追加 十卷

留鳴論 一卷

空閑夜語集 八卷

日 別集 一卷

靈序夜語大意并 一卷

大道寺友記 一卷

曰書云天道寺友記云在芝城通東雲山寺也寺小矣
左墓銘云 先生著大道寺自平姓也諱重祿稱元
即老而稱友其先生自內府重祿寺水中平也之滅
其為區於城內徽是即大道寺也因名焉中業有大道
寺大師重時有良年平親臨伊勢寺 倭起於東方禱
北条氏長城於相用也而余方此時也重時最有汗馬之功

三

歷事北朝... 遂於... 蓋無... 日為... 奉... 之長... 又... 主... 東... 蒙... 此時... 為... 崇...

微... 信... 今... 若... 則... 侯... 侯... 神... 五... 繫... 或... 究... 真...

三

微... 信... 今... 若... 則... 侯... 侯... 神... 五... 繫... 或... 究... 真...

義命善於衆貴平日詠歌盧有送休又自好畫寺
星像儀事雖不足以此爲端解明才可矣但常事遇
危於太平之時而亡竟永十三年三月生于越後州村
上志今茲集編十五年庚戌冬十月二日没于武州江戶
靈臺島三郎舍年九十二其一言不毫以天年終焉
師中尚復居不青是祥林兵和南謚曰奇德度殿
節忠友之信是古人有言先祖無美而稱三其誣也者善
而不知不明也知而不傳不徒不首于取士紳年社意爲請
表事哀慕悲泣謹述其履以備不朽三年
及山壯年浪人の時不江の死方至子村の辺石開
前不意拒了東監守代のりり美のりり
文章

友山著述 落德集十三 靈序夜話十 武道初心集五

落德集追加 常論 石開夜話集 日記集一

靈序夜話大意并一

四戦記開三卷

根序直利撰

木村高敷訂

自徳安記三卷

武家問談 二七卷

武徳初年集成九十三卷

木村高敷撰

心書三木村高敷の墓馬鞠對松山家兵守不あり差銀
尺譜高敷事也美禰教有武州靈島人也今姓根序

日親父嘗信官暫斬箱詩直利之身三子也親母一
也或以定室八年庚申十二月二日生居元祿十五年
名于大衛騎郎木村義久無子乞居為嗣因以其
妹妻之至永四年丁亥木村翁歿居嗣為後事在四年
三月為大衛騎郎九年甲辰居新衛騎郎十八
年居大衛為世子宮大官奉職是敬寬元年辛酉
近為世子宮內給事命二品居元世未有位二品者
居乃如是又以為寵居親父暫斬箱好記載因稍以
墓 神祖事美居童訖亦好之及長讀其父書始
覺世之記載者多難俗說殆夫其矣慨然志於編
纂暫斬箱羽書著四戰紀聞三卷四戰謂姊川三方
原長藤長湫四知之役 神祖之大事也居從如訂正又

記 神祖時人美言併行者武家因談意武德安
武記三十一卷錄原之役 神祖多命三事又記
神祖時人美言併行者武家因談二十又卷又
更得訪多稷得 神祖一世之事矣而者武德編
年集或九十二卷書成而進三於 朝賜時衣二願以
賞之時乘商夏也身又進四戰紀聞三卷皆刻 書
之居又博採武德最善擊乎劍騎馬自謂即 朝士
以下後字者無慮數百人然居之前好在記載雖直為
官曹必以書策紙筆自隨曹事小暇且抄日筆其
進食在私家夜往出一室盡燈烟三事於極者德
則即一語而定則無復執業家人莫知其自起意
精苦如此為內給事 歲餘在成秋忍復病疾不起及于

四

一月一日丙辰終於家年二十三無子前之養淺香
白子以馬朝之為身亦習擊劍騎馬皆熟自后
白官而後命高章代之教授門人后臨終謂高章
曰吾愛親母之恩殊深願定其祀於地下吾死葬於
其室側故葬於芝涌原泉兵寺親母一色日坐側
太等以前以居請序編年集成於是高章使人
致書其狀稱先君子遺命以之墓銀既訖受后知
愛不敢拒其請遂為之飲酒嗚呼世美生于羽林孤
兒寡子克憐厥心出為人後保祿身祀奉公無私我
家亦理能載豈好之夫自妖國劫奪了大小以善成志
取兵也藏于秘府毫門如你其村有取嗚呼世美材官
之傑得經眾技武術最絕乃世之大埋骨寧存不朽惟

業終守其門

信陽太年統程

太皇太后之面不智博徹真我七木村孫子即深高敦屋

潘翰譜

東雅

五事琴合

南真志

蝦夷心

米覽遺言

孫子無法釋

今朝軍苦考

方集合論

鬼神論

傳聖集

白石詩竹

白石餘稿

北海隨筆

同文通乃

古史通

文萃乃

行賞錄

骨董錄

刊祖成績

讀文解論

刊祖成績

新刊白石集

同書云白石先生姓新田之能海居美凱後身之是
勤耕由之抄之入儒由之木下順庵の門人初名純平
在中白石の神也之集序本歳五月十日卒年五十二
九段門内野原高倉之報恩寺塔頭馬徳寺に葬
著述書目云云年朝軍書乃一説小朝倉の述云云
の心録不刊也云云

詞華和歌集

藤原頭輔正

山城守藤原頭輔正之子累近左京大夫叙從三位

(四)

天養元年藤原仲實和歌集果立

真儀抄

初學抄

袋抄

藤原清輔撰

同書云藤原清輔撰之子累近長門守身叙正

四位下類信博古尤善和歌者真儀抄初學抄袋

抄子等

中右記

藤原宗志撰

同書云藤原宗志撰中御門右大臣好字博覽者中

右記

千載和歌集

藤原俊成撰

同書云藤原俊成撰之子累近皇太后宮大夫叙正

三位美敏完雅幼好和歌師事金吾基俊文治四

年撰千載和歌集元久元年十一月先身九十一

新古今和歌集

九子全撰

藤原之家撰

同書云深通具通親之子累近皇太子身任大納言性

善和歌藤原有家藤原之家俊成之子累近

權中納言兼氏郡卿叙正二位率性類信博覽

四

多通尤善和歌述作頗多仁治二年八月亮年
八十 藤原家隆光隆之子累迁官内卿身叙從
二位美敏考授尤善和歌人稱当世人麻呂 藤原
雅經通三具山下五人又之二年撰新古今和歌集
又源家長藤原清範鴨長明藤原冬能亦預
焉後之家雅經新和歌集

山槐記

水鏡

中山志親撰

同書中山志親作山槐記及水鏡

續後撰和歌集

藤原馬家撰

續古今和歌集

三子公撰

同書云藤原馬家之家之子累迁雅大納言兼白河
御善繼家業建長三年十月撰續後撰和歌集
又永二年又于藤原行家藤原光俊等撰續古
今和歌集建仁元年五月亮年七十八
同書云藤原基家良經之弟三子累迁内大臣性奸
和歌又永二年預知撰續古今和歌集

續拾遺和歌集

藤原馬家撰

同書云藤原馬家之子性善和歌累迁大納言
仁安元年撰續拾遺和歌集九月亮年九月亮年三

十五

新後撰和歌集

續和歌集

日書云藤原与世与白之子累年大納言叙正二位性善

和歌正三年撰新後撰和歌集文保二年撰續和

歌和歌集延元二年八月庚午年九

玉葉和歌集

藤原与世撰

日書云藤原与泉与教之子累年通權大納言叙正二位

正和元年撰玉葉和歌集

續後拾遺和歌集

字日撰

凡雅集

秋原法皇御撰

新和歌集

藤原与世撰

日書云藤原与世与通之子累年通權大納言叙正二位

元年撰凡雅集續後拾遺和歌集又凡雅集則

秋原法皇自製作必文四年与世又撰新和歌集

歌集

神皇正統記

源親房撰

四

外与藤原与教
系通權大納言
二位

日書云海親房 仰重之子 任大納言 執政 無私 初身准位
涉獵厚籍 綴拾 具安 作職 原抄 及神皇正統記
新拾遺和歌集

藤原為明撰

日書云藤原為明 為藤之子 累遷 權中納言 叙正二位
貞治三年 控新拾遺和歌集

新後拾遺和歌集

二子全撰

日書云藤原為重 為冬之子 權大納言 永德二年 俱撰
新後拾遺和歌集

昌世問賢註

百寮訓要抄

藤原良基撰

日書云藤原良基 兼美入世 道平之子 兼美 兼將
任右大臣 為南白身 拜太政大臣 叙從一位 能持亂世
盡忠 行事 著昌世問賢註 百寮訓要抄等

河海抄

海善改撰

日書云海善 成順 德洗 才三 世孫 稱 四 遷 右大臣 好字
著河海抄

新續古今和歌集

藤原雅世撰

日書云藤原雅世 中納言 永享十一年 撰新續古今
今和歌集

三

增鈴日記

道細母世

日書云道細母世藤原命年之廿四白身家毒著增鈴

日記

源氏物語

紫式部日記

日書云紫式部藤原鳥時廿事上東門洗者源氏談

又有日記一卷

系花物語

赤澤衛門柱

日書云赤澤衛門時用之廿事上東門洗者源氏談

枕草子

清少納言

日書云清少納言清原元輔廿事一糸希皇后切而

好學願通更詳著枕草子

諸經註疏 卷之三

秋常騰撰

日書云常騰性高橋公事北人也道業純淑博究經論

決扶義理独立一時著者諸經註疏卷之三卷學者侍

誦弘仁六年九月卒年七十二

大徑學義 卷七

秋美靴撰

日書云美靴姓藤原諫議大夫顯美才學也所授無隔

守學相學又知禮禪寺業經法手嚴覺靴得授字八

諸弟而歎得隆三傾頽乃加心披身感靈夢赴招澤
正得戒儆即歸中司寺同律請行羯磨自此戒法
亦無初莊在忌辱以珠瓦至中司之見地勝形申官建
必盡矣曰故身洗後移指光明以而終著述大任要
義又卷貞慶法師稱三

續日本紀

淡海三和徑

大和志之淡海三和徑于大友當孫修程續日本紀才學海
一時

式部省例 二卷

和氣詩

和氣清麻呂經

曰書云和氣清麻呂為野天皇愛信之北時僧道鏡因
幸於 天皇去警拜 稱法王慶雲三年大寧王神
向蘇麻呂媚道鏡為八幡神託曰令道鏡即帝
位天下太平道鏡聞三情善 天皇召清麻呂曰夢
有人來稱八幡神皮之鳥奏事情不尼法均朕各曰
法均軟弱難堪遠終道清麻呂世道早卷聽神之教
道鏡復與清麻呂美力以大臣之位是終真人是永
為道鏡之師詰清麻呂曰道鏡若登天位吾以何面
目向鳥真臣者十三子共鳥今日之伯夷身清麻呂深
然其言但社神宮降來奏以矣 天皇不忍誅流大滿
國于時藤原百川世其志烈割備後國封戶御二千
戶送之於能行 聖德元年 較復今位至德三位 臣辨

四

麻呂謀於唐務允明古事程氏部省例二十卷唐書
中宮散程和氣請奏之帝甚喜之大率南辺以和定
置弘文院之曆十八年二月亮

刪定令

編入書程

曰書云福入指此歷中唐上書言使宜事多神益
徵馬左于并前言政務多破者納奏程刪定令十
九年二月亮

續日本紀

淡海三船程

曰書云中村巨群雄為麻永詞但預程續日本紀

凌雲集

小野岑牙程

曰書云小野岑牙傳字善為文善於朝奉教程
凌雲集

文華秀草集

仲雄玉程

曰書云仲雄玉善於朝奉教程文華秀草集

弘仁式

藤原冬嗣程

曰書云藤原冬嗣內麻呂才二子善自溫裕識量弘雅才
兼文武道才美諸貴客接物能得衆人歡心分封戶
以脈諸貧弱建策館而勸子弟立曆五年任大判
事采懸頭官大同二年為左議右衛門督弘三年

完

此乃近大將身叙從三位七年中納言九年轉大
納言加正三位二年轉左大臣叙從二位天長二年
轉右大臣三年七月亮五年十一月十一日詔贈正一位兼左
大臣藤原高野秋保字人藤原三年攝關
物部敏文等預焉

合義解

清原夏野程

曰書云清原夏野不復生身五子景近參議中納言
身轉右大臣承和四年十月亮五年十二月亮六年
合義解南淵弘貞善道真貞預焉

一身要訣

往生要集

清原范程疏

大業對

俱舍抄

因明相違注教

秋深信程

曰書云深信性下台為木野人也父名正親母清白上層
山事慈覺大性聰明究顯密教五種法師四種三昧
無不兼練過壯歲高業名所長檜川寺以著述為己
任前謂一身要訣往生要集河孫范程疏大業對俱
舍抄因明相違注教等也台願教法此時為盛負及
兼業者多時稱慧心院信都信作在第十年七疑問來
國尚湖智社法師寬仁元年二月十日德皇印端坐進

孝

心寄... 初瀬寺縁起

首祠公様

日書云城上院初瀬寺... 一巻傳云首祠公前記

新字

境部石積權

日書云境部石積天武... 十一年春初者新字

日中記

舍人親玉撰

日書云舍人親玉天武天皇... 天皇方三皇子也

勲古事

文武天皇後二品養元二年... 馬一品四年

五月春初修日中... 紀八月知大政官事

十月亮贈大政大臣... 天平五年淡路帝

日書道盡敬天皇

律令

初撰

日書云思陸皇子... 天武天皇皇子也

天皇初皇子及藤原... 不比等下毛野朝臣

伊古連得德伊余... 郎連馬養等撰

三年馬知大政官事... 慶雲二年五月亮

和歌式

藤原清成撰

日書云藤原道成麻呂之子也各涉群書之類習術教
以等補流職歷日外性率直吏也長祥為皇軍中
丞奏議從三位歷祥正刑部卿天心元年五年
戶近大等神正歷九年九年二十七年或云等好和歌
著和歌式

初權

日書云藤原不比等一作史錄云之子持統天皇十年
授直原貳任中納言大聖元年叙正三位為大納言和
朝元年加正二位拜右大臣養元四年八月病薨天皇
甚愛惜大赦天下以禱為名東亮年二十三初贈大
政大臣正一位謚之文忠公博學雄文嘗早刑部親

壬年俱奉勅撰律令中與國皇朝延聖年四海平
治皇元年皇孫四年連封淡海公

續日本紀

菅野真道權

河內守云菅野真道少守之男也其之百濟國人皇龜九
年二月為少內記自是累官迄歷四年為東宮學士
八年正月從五位上三月為伊豫守七月長請改連姓
賜朝臣於是新賜菅野朝臣之歷十六年兼伊豫守
二月加從四位上依繼續日本紀之考也三月任右大弁七
月為伊豫守九月拜勅解由長官十七年十月為左
衛士督二十一年二月兼相模守二十二年三月任奏議
二十五年正月兼大宰大貳任山陰道觀祭使五月叙

正位六月二年二月葬刑部卿十一月遷兵部卿
 三年三月任左大將十一月葬大藏卿四年三月授
 從三位三月任左大將五月七月葬常陸守仁仁三
 年正月十日致仕五年二月亮身年三
 二部義一卷
 元言義一卷
 四部義一卷
 二部義一卷
 比量義一卷
 因明句義一卷

秋隆海撰

撰澤心云隆海性清海平撰可人承和十三年身維

摩合講師生平勤述作二部義方言義各一卷四
 部義二部義比量義因明句義各二卷

徒然草

吉田兼好撰

兼好傳記序云吉田兼好者卜部兼頭子大職官十
 八世孫也仕後宇多院而為武衛次將正中之年常前
 御後截髮入修業院以俗名即為法名是為入侍
 覺而孫儒入侍識公筆且好名莊詩兼好傳歌者二
 傳兼之門業而入五侍新撰世梅而大玉所著徒然草
 兼好撰世俗觀如幻有逝水不舍書庭嘆而無感人
 情抑我足前謂兼人筆隨筆類也之抑寂莫草傳
 世久無古德今未為註解之十有餘書觀身其書者稱

頃馬又書之見或没法旅白之道未能辨集後有

日書^の片^の三^言曰^の集^好の書^の後^の年^のル^ル葉^ル
 中^の子^乃多^ク存^スル^ノ事^{あり}テ^ルの^事あり^テり^の事^{あり}及^リテ^ルの^事あり^テり
 乃^ハ多^ク存^スル^ノ事^{あり}テ^ルの^事あり^テり^の事^{あり}及^リテ^ルの^事あり^テり
 乃^ハ多^ク存^スル^ノ事^{あり}テ^ルの^事あり^テり^の事^{あり}及^リテ^ルの^事あり^テり
 乃^ハ多^ク存^スル^ノ事^{あり}テ^ルの^事あり^テり^の事^{あり}及^リテ^ルの^事あり^テり
 乃^ハ多^ク存^スル^ノ事^{あり}テ^ルの^事あり^テり^の事^{あり}及^リテ^ルの^事あり^テり

新拾遺集

并註

某卷集

明和御
吉田守好撰

日書之為心鈔^の頃河者^ハ不^レ野言^ハ大^ニ納^ル言^能矣^後流^也
 二^今身^上世^の卿^の心^の者^ハ今^の傳^の受^の一^流也^也
 明^の卿^の新^の於^の遺^の集^に在^リし^を未^レ終^スル^ノ也^ハ子^ノ頃^の河^也
 續^之也^ハ行^フ者^ハ并^テ註^ス也^ハ集^ノ草^を卷^集也^也
 不^レ時^代後^年多^シ流^レ後^之嚴^院之^頃法^師也^至貞^享
 二^乙丑^年三^百年^年
 頃^の草^也
 本^朝避^史之^氣評^者草^頭子^也後^年多^シ流^レ北^面之^臣
 此^仕在^兵衛^作帝^之崩^之後^出塵^嘉勝^有文^才善^於作^歌
 乃^時子^頃河^也洋^平慶^雲其^文相^也稱^和歌^而天^立
 此^言曾^不曾^終有^評歌^且暇^日作^傳誦^草子^稱佳^也

(意)

初... 伊勢...

伊勢物語...

伊勢物語...

日書云伊勢物語二条南東河邊...

和語記

日書上人傳...

日書云年能寺日書上人連...

祝草子

清少納言撰

日書云昔願寺清少納言の巻...

古今集

初撰...

日書云十生の地の里...

宗

碓の子及許有... 今地... 碓の宝持... 松平子... 伊勢初... 源白井月抄

切臨傳

同書之七条道場... 伊勢初... 源白井月抄

伊勢初... 源白井月抄... 伊勢初... 源白井月抄

紅江大帥抄

同書之空海... 伊勢初... 源白井月抄... 伊勢初... 源白井月抄

五

元平不甲朝下高井山... 仁明帝の承和二年三月廿日高井山今剛... 入定... 仁元... 醍醐帝... 延喜廿一年... 弘治九年... 三教論... 性靈集

道遊集

松永貞徳撰

日書云貞徳名... 勝遊軒... 延治九年... 高槻の城... 冷泉の明徳の息女... 政次打九の年永徳蒙

六

子... 龜松九... 松永... 長の... 貞徳... 渡殿... 不... 中渡殿... 孤心... 隆... 和奇... 和奇... 今... 貞徳... 流... 貞三年

霜月十音九十餘載...
不希... 和舟身四母道...
一子... 如奇...
不端... 講談...
大... 七...

今朝逸史

元政法師撰

貞徳和舟の門人... 元政法師撰

貞徳和舟の門人... 湖春... 和歌式

和歌式

日書云... 三橋... 吟...

舟載少... 孫姫... 和舟
和舟の三式... 舟の...
注... 舟...
舟... 舟...
舟... 舟...
舟... 舟...

鴨長明集

海道記

道記

四季物語

無明抄

方丈記

拾玉集

鴨長明集

日書云長明父... 鴨の... 長徒子... 延保九年...
月十七日... 叙... 法... 連... 載...
新... 載... 舟... 舟...
海道記... 道記... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟...
拾玉集

拾玉集

古水和舟抄

日書云古水和舟... 慈円法性寺... 園白忠通... 子... 門...
二十二代... 座... 東... 古水... 嘉祿元年...
九月廿九日... 嘉祿元年... 和舟の集... 拾玉
拾玉集... 一...

拾玉集

河海抄

西三系殿長

河海抄

西三系殿長

日書云河海抄西三系殿長

の心義

源集河海抄

源集河海抄

西三系殿長

日書云系式部

殿の北

候

書云系式部

武彦抄

私語

私語

心敬傳

日書云横川

抄

令義解

清原復

日書云

天長十年

三

清原復

今の義解を撰ぶるは
道心集

高年上人世

曰書云高年上人奇解初撰
凡邪身之五三
代の集小也自道心集より奇
妙月久し世

大元没集の書は
二鑑撰

二鑑撰

曰書云宗鑑小も忘却孫三師
の書方家の右等
ありてあはれ
の書不もむ難言の
一可北界
の書は白紙
今もあはれ平生備書
し業上人
濟の書は油筒
宗鑑の書は
子も下友も

曰書云一紙十錢油筒禁割
佛語
大元没集も撰り
逢奇も宗鑑の
子
其子三回
句大元没集
也



(2)

今の世は...

百五十八

日...



Vertical handwritten text on the right page, likely a continuation of the document's content.

Left page of the document, mostly blank with some faint markings and a small dark spot near the top center.

